

『今日新聞』に寄せた逍遙の逸文

池田一彦

序

斎藤緑雨の、作家としての活動が『今日新聞』からであつたろうことは、先に若干の考察を試みたが、今回は、私蔵している『今日新聞』を紹介することとする。

『都新聞』『東京新聞』の前身である『今日新聞』は、本邦二番目の夕刊紙として、明治十七年（一八八四）九月二十五日、毎夕社から創刊された。社長は小西義敬、編集の主任は仮名垣魯文であつた。魯文、緑雨のほか、有名などころでは黒岩涙香なども密接な関わりを持っている。た

だ、惜しむらくは、原紙が今日に伝わらない部分が多く、為に文学史的にも大きな欠所を生じているのである。³⁾

土方正巳氏の『都新聞史』（平3・11）の「あとがき」に、次のようにある。

国会図書館には『都新聞』の創刊号から終刊号まで完全にそろっているものとばかり思っていたので、明治十八年五月から同二十五年までの分がないことを知ったときには、あわてざるを得なかつた。この時期は経営者が何人か入れかわり、社名も毎夕社から今日新聞社、みやこ新聞社となり、夕刊から朝刊に変更されるなど、社史にとっては最も重要な時期なので、簡単に

諦めて引きさがる訳にはいかない。そのとき偶然にも、北根豊氏によって明治新聞雑誌文庫の未整理の書棚から平仮名『みやこ新聞』の改題初刊などの十日分の原紙が発見された。つづいて新聞資料ライブラリーの羽鳥知之氏から慶応大学図書館（現・三田情報センタ）に明治二十一年十一月十六日から翌年五月三十日までの原紙があることを教えられ、その合本二冊を借り出すことができた。これによって『みやこ』が漢字の『都新聞』に改められたのが、明治二十二年二月一日であることを確かめられた。当時の関係者には日辻保五郎、渡辺治、相島勘次郎ら茨城県人が多いので、土浦周辺をたずねてみたが、収獲は得られなかった。このうへは、旧家を取り壊すとき、土蔵の片隅に積んであった原紙の山をみつけるといような偶然を待つしか仕方があるまい。

現在未発見の原紙は、つぎの通りである。

明治19年5月12日～12月30日

明治20年1月1日～12月30日

明治21年1月1日～11月15日

明治22年6月1日～12月30日

明治23年1月1日～12月30日

明治24年1月1日～20日、4月19日～12月30日

以て、土方氏の苦勞と無念さを、そして更には『今日新聞』未発見部分のいかに多大なるものがあるかを窺い知ることができよう。

『都新聞史』以前でも、例えば、探偵小説、特に黒岩派香研究家として知られる伊藤秀雄氏が、古書展で偶然、明治二十一年一月十九日付ほか全四枚の『今日新聞』の原紙を入手、それまで不明とされていた涙香の『法廷の美人』初出掲載時が、明治二十一年一月であることを確認、報告するということがあったことをここに紹介しておくのもあながち無意味ではないだろう。

さて、これも偶然、私が所持することとなった『今日新聞』のことである。私も、古書展の目録で『今日新聞』一紙が出品されていることを知り、齋藤緑雨との関係も密接な新聞紙ゆえ、内容の如何について何ら詳細な情報も持たぬまま取りあえず注文、入手したのであった。十数年以前の事と記憶する。

その原紙は、明治十九年十月九日（土曜日）付、第六百

十六号の「附録」であった。

以下にその体裁を記す。紙幅、縦四十九・六センチメートル、横三十六・六センチメートル。紙面、五段制、一面一段三十六行、二面一段四十三行、三面一段四十五行、各行いづれも一行二十三字詰め。総ルビ。一面下二段に小林清親のポンチ絵、二、三面には六種の挿絵があしらわれ、そのうち三種に「可雅賤人」の署名がある。「可雅賤人」は、⁽⁵⁾ 稱野年恒。

記事だが、創刊二周年の祝辞を連ねたもので、

◎今日新聞の未来 春のや主人寄稿

◎賀すべし 江東散士 (以上第一面)

◎池畔の乱菊に題す 伊東専三

◎菊慈童の画面に題す 清淵舎橋塘

◎菊水に寄する沸湯 永井小石 (以上第三面)

◎芸妓の観菊 みどり記

◎陶淵明 帰居来居士醉記

◎菊畑に寄する二周年の祝辞 斎藤緑雨

(以上第三面)

の八種の文章が掲げられており、第四面は全面広告(小説政治)「雪中梅」上篇(小説政治)壹冊の広告も見える)である。「持主兼印刷人」

は「横手文爾」で、「編輯人」は「鳴子準造」とある。寄稿・執筆者のうち、「江東散士」「みどり」は「斎藤緑雨」と同一人物で、「伊東専三」と「清淵舎橋塘」も、一般に魯文門の戯作者として伊東橋塘で通っている同一人物である。「永井小石」は永井碌で、「読売新聞」にも在社したところのある新聞人。「帰居来居士」については、残念ながら目下のところ不詳である。総じて、緑雨といい、橋塘といい、筆名を変えて二つ三つと記事を書き分けているのが面白い。逆に言えば、十九年五月の魯文退社あと、雑報・艶種(艶)から祝文まで、器用に書き連ねうる人材が明治十九年十月の時点で、社内ではかなり限られていたらしいと推測できるのである。

最後に第一面に未来記風な滑稽本仕立ての「今日新聞の未来」を寄せた坪内逍遙と『今日新聞』との関わりについて述べる。逍遙の日記「幾むかし」の明治十九年八月の項に「此月より今日新聞の論説を補助す」と見え、十月の項では、「同三日より矢崎鎮四郎寄寓 嵯峨のやおむると附ける『神経の罪』の稿を今月より今日新聞に掲載す」とあり、ちょうど明治十九年の八月以来、逍遙と『今日新聞』

の縁が深くなって行ったことが知られるのである。

逍遙の回想文集でもあり、隨筆集でもある『柝の帯』の「二葉亭の事」の中の「齋藤緑雨と内田不知庵」の文中にも

緑雨の作物を読むと、彼れは夙くから一廉の狭斜通であつたらしく想像されるが、身錢を切つて屢々遊ぶ余裕のあつたとも思はれぬ彼れであつたから、それは、主として老通人で、『今日新聞』といふを発行してゐ

た小西義敬に愛され、其配下に雜報記者となり、花柳遊びのお侶役を兼ねてゐた結果であつたらうと推測される。明治十九年ごろ、私も小西に頼まれて、『今日新聞』へ、何か三四回書いて送つたことがあつた。(傍点筆者)

とあり、逍遙の文章が、何編か『今日新聞』に掲載されていたことを知るのである。従來の著作年表類に、それらは一切挙げられていないので、念の為、逍遙研究で知られる青木稔弥氏に尋ねたところ、やはり『今日新聞』自体が残っていないので、現時点では、逍遙の『今日新聞』掲載記事は、ひとつも確認されていないとのことだつた。

そこで、手元にある一枚の『今日新聞』も、この機会に世に公表するだけの意義はあると認めるので、一にその全

体を影印に掲げ、特に、文学史的意味合いの強い坪内逍遙の逸文を、変体仮名等含めてその資料的価値に留意して、全文影印にて掲げることとした次第である。(緑雨の三種の逸文は、やがて『齋藤緑雨全集』第八巻に収録の予定なので、敢えてここでは逍遙の逸文のみに限定したことを断わっておく。)

(95・10・25)

注

(1) 『齋藤緑雨の出版期・考』(『成城國文學論集』第二十三輯 平成7・3)

(2) 『今日新聞』は、明治二十年一月一日、社名を今日新聞社と改めるが、さらに翌二十一年十一月十六日、社名をみやこ新聞社として、『みやこ新聞』と改題、翌二十二年一月一日、『都新聞』に改めた。昭和十七年十月一日『國民新聞』と合併し、『東京新聞』となつた。

(3) 緑雨に関して言えば、彼が「日用帳」に記している、「杜鵑里初声」(ほしとぎすまのうらな)、比翼遊鴛鴦毛衣「紅白梅花笠」といった初期習作が『今日新聞』に掲載された可能性は極めて大きいのだが、いずれも現在確認できぬままである。処女作とされる「善悪押絵羽子板」と、それに続く「雨夜の孤火」

掲載の部分が今日残っているだけでも足れりとしなければならぬ現況である。

(4) 『法廷の美人』の発見（『本の本』、昭52・2 『黒岩涙香研究』昭53・10に収録）

(5) 「可雅賤人」を年恒とするのは、『今日新聞』明治十九年三月二十二日三面の「◎濡燕子宿翁」という新刊書（山東京伝の翻刻物）紹介の記事中に、「これへ筆頭の濡事師可雅賤人の年恒さんが色気少なで凄味沢山の挿画を添られ」云々とあるのに拠ったのである。因みに、『今日新聞』は、当時（明治十七年～十九年頃）、他に落合芳幾、尾形月耕、歌川国峰、歌川国松といった浮世絵師が挿絵を受け持っていた。

(6) 明治十九年八月二十七日刊。因みに、下篇は、明治十九年十一月三十日刊。

(7) 『坪内逍遙研究資料』第五集（昭49・5）。

(8) 昭和八年七月刊。初出は『芸術殿』一ノ七（昭6・11）。

(9) 例えば、昭和女子大学近代文学研究室の『近代文学研究叢書』第三十八巻（昭48・8）や、逍遙協会編に成る『坪内逍遙事典』（昭61・5）所載のものなど。

(10) 『坪内逍遙事典』所収の「著作年表」の増補を企図した青木稔弥氏「坪内逍遙著作年表稿（一）」（『文林』第二十四号、

平1・12）は、『女学雑誌』三七（明19・10・5）所載の記事をもとに、明治十九年九月『今日新聞』に「坪内雄蔵」署名になる「小説の改良を促す」の一文が掲載されたであろうことを指摘しているが、やはり「明治十九年九月十月の今日新聞所蔵先不明で未見」とされている。

今日新聞

附錄

明治十九年

春の王八節

●今日節の未來

幾つになつた節屋花園石道門常盤山

の庭前五層の櫻千枝々雪覆井を鏡と告げたる

が所々赤いのが會ひまて腰その字形風か

されりか池にうらやめれをまゝに懸架し場

所を歩いた日暮櫻の附いたる柳帯を五六枚

てゆけ櫻とわいてるうらやめか一面うた茶也

つとが懐念つてる反面にて月う得て兼無業

のお料理無業中作裏しつ柳涼透梅近來マク

と遊人入園會前野の樹土つさのさのやう

會場も盛んなか池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

大宴會時か池邊の御亭主、今日も自出な

る所が價値を高くし、其折衷の點を

に照して、折衷の點を、その折衷の點を

録り、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

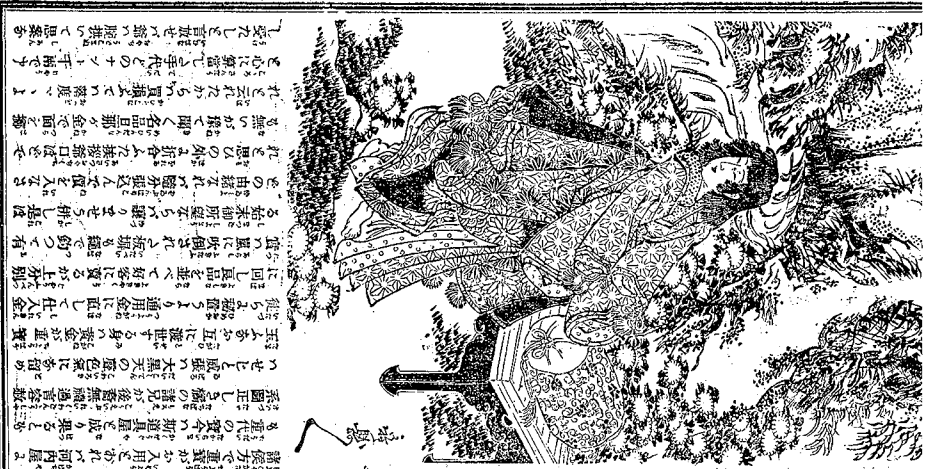
の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を

の折衷の點を、その折衷の點を、その折衷の點を



からど盛ふと其たにびに張
 へ、車馬被田所に河内屋多石備り、屋敷置あり
 の足付、其の車馬を言たぬ
 羅、羅と見出し、公の某、海舟にて、系國、上
 へ、その命を、さけて、河内屋、多石、の、大屋、を、思ひ
 出、その品、を、承、け、し、て、出、し、て、廿、廿、上、る
 上、の、命、を、承、け、し、て、出、し、て、廿、廿、上、る
 羅、羅と見出し、公の某、海舟にて、系國、上
 へ、その命を、さけて、河内屋、多石、の、大屋、を、思ひ
 出、その品、を、承、け、し、て、出、し、て、廿、廿、上、る
 上、の、命、を、承、け、し、て、出、し、て、廿、廿、上、る
 羅、羅と見出し、公の某、海舟にて、系國、上
 へ、その命を、さけて、河内屋、多石、の、大屋、を、思ひ
 出、その品、を、承、け、し、て、出、し、て、廿、廿、上、る
 上、の、命、を、承、け、し、て、出、し、て、廿、廿、上、る



◎今日新聞の未來
春のや主人寄稿

處にお酒となる麴町區花崗石造の門搦へ常磐木澤山

の玄關前五層の樓へ觀々崔嵬雲井を凌ぐと書いたと

は何やら未來記のお官舎めきて腰をくの字形に屈め

ざれば少々這入にぐら聞ゆれども十三毛嚴格しけ

所であし燦たる日光摸様の附いたる切符を五六枚持

てゆけば誰でも「わいてるう」と大きき面へ又來たせ

つとどお得意現でつと反身にて昇り得べき衆庶共樂

のお料理茶屋和洋を折衷し、割烹鹽梅近來メツキリ

と評判よく國會の議員朝野の紳士のいづも雲のやう

會合して爰で懇親やら演説やら乃至ハ送別會合奏

會扱も當るるか此樓の御亭主、今日も目出たさう

か大宴會聞けば毎夕社の起業祝ひ今年ハ「六年目」の

大祭とて陳ひが今も尙慣例にて門外ハ一ぱいに赤ひ

燈籠景物に見せる仕掛花火ハ樓外ハ人通りをよどま

せたり藝妓もやうやうに廢れたと見えて彼方で樂隊

の興ゆかしい音樂ドマバオ大ツサヤソの野蠻氣あう

流石に上品ある樓下樓上洋風のお茶番ちやうど今終

きて人々おのがじ、喋々晴々所謂「ゴツゴツ」
 はじめたる最中一体お客種ハ何者じやと見れば扱も
 おもちや店をぶち毀したやうに居るぞ居やるを様々
 ある人物官員新聞記者夫人嬢子學者商人西洋人老
 若男女ゴツゴツ〜いづれも毎夕社が眞屑と見えて賞
 るい〜大層も褒るい
 (官員)進歩すれば進歩するもんどや「今日」も軌近ハ
 非常に好新聞にかりよつた我輩が大藏に奉職ちよつ
 た比にハ折々スツパ抜の人身攻撃をしようて危険か
 新聞じやと思ふた事もあつたが(夫人)テヌヨ妾しあ
 んざアあの時分よやア恰當何でしたからスツカリ
 お馴染のお客ハ減るし貴君よやア疑ぐられる眞個に
 眞個に(商人)それがさ三年は送以前からしてまるで
 人柄が違つたやうよスツト上品お好い新聞にかつて
 第一報道を神速とぞる商業上の事に注意をして折々
 爲になる實際論を吐くし(學者)畢竟雲を攫み風を逐
 ふやうき擬ひ哲學者の口氣を氣取つて空理を談せざ

る所が價值さ凡そ新聞紙といふ者ハ其折其時の事件
 に關して窮所て論せるのが務であるのに社説を講義
 録クなんぞのやうに思つて二日も三四日も續けて書
 くのみ……………それも空論や虚喝めいた社説をサ、
 ……甚だ本分に違つた話だ西洋の新聞を見るが
 い、社説の續き物ハ絶てない事だ之を要するに報道
 が主(洋人)貴君説まことに道理わります我國新聞
 重に注意牽く爲かきまど大い事小い事總て其日
 の事社説でかきまどを雜報ふかくばかり解りませんそ
 れ故に重き事社説にかきまですらして世間の注意を
 喚びます忙がしむ時ハ社説だけ讀みまですそれで要事
 どのりまど日本新聞社説餘計な物過去の事かきまです
 未來の事かきまです新聞屋の職分でないハ、今日新
 聞これれまさせん感心感心(實業家)社説ハ兎も角もど
 した所で報道の早いのが千兩ですヨ昔の時勢なら一
 ザ知らずですが今どやア東海の鐵道もでき國會も開
 け雜居にもあり事業が百倍も多くなつて實に寸陰を
 爭ふ時勢僅々二十分後れて聞いても已に好機會を失
 ふ事がある殊に實業家の身にとつてハ万事出來事を

早く知るが最も必要の必要ですから(政治家)それ
 我々も同感でも今日何事の會議が有つたところ如何
 る人々が集會したうと其日に知らあいで不便利が
 わるが其れを迅速に知らせて呉れるに蓋し(風流家)
 此新紙に止めたりでげせう次いで稱すべきの續物で
 とせ例の觀察を全く廢して眞の美術主義の小説を取
 換へそれ一枚に一回限り滋味澤山に綴つて載せ
 るの我々文人の慰みよもなりやす單に婦女兒童の斷
 弄物にあらせつ(書生)社説が實地主義の通俗論であ
 るケイ暗に不満足を抱いちよつたが折々「時事論」の
 別欄を設けて長い續き物の理論をも載せ居るあれ
 への他の新紙の社説いふ場々中高尙で面白いわい
 (新聞好)シカシ語る處新聞紙の價値の報道の先後と
 運速にありです恰も某君が被仰つた通り今の鐵道の
 世の中たから一寸一例を擧げていへば今朝まで來あか
 つた大切な人が晝に到着する事もわらざこれら
 今日新紙に依らざる限りハ其日に知る譯にハ参りま

せんラそれれ考入れば天下多事とちつた今
 日お於て益々此新紙の必要が見えまほ外の新聞屋の
 配達がやう／＼と出掛る比よ已お其事件ハ
 百も承知で或ハ汽車に乗る旅立の用意或ハ電報を
 外國へ送つて直ハ商務上の談判をもちにつけて
 も決して手後れをせぬといふのハ全く此新紙を讀ん
 でお底で(社員)左様に御稱賛を蒙りますのも畢竟
 大方のお引立にて我社が盛大な起きますゆゑ自然よ
 探訪にも勵みがつき事務が着々と進りまして(皆々)
 ノヨ一毎夕社うましく言ふせうて見りや「今日」の今日
 わるハ(社員)屹然と立上りて(悉く)して偶然でハで
 ざいません「折から樂隊の音楽はじまる」全く大方の
 看官諸君の大鼓に嗚物と言はざる可らず弊社が今日
 の盛大を見るハ社員の方なりと言はんよりハ我に信
 切ある諸君の力が多きに「サルゴール」と言ざる可ら
 ず弊社の今日よりして益々力めて更に改良の幕開を
 なし(此中音樂激しくさう演説の聲半ハ聞えど社員
 ハいつしか浮出て幕開三番更を氣取つた積り歟)
 ラツパ、ピヤノ、ラツパ、ピヤノ